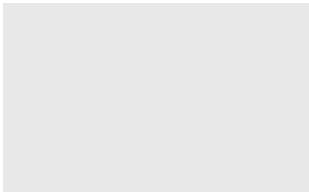


書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します



民芸の意味

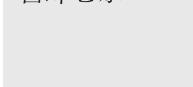
道具・衣食住・地方性

SAMPLE

式場隆三郎

S1 hi-Shinsui.com

書肆心水



書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

目  
次

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

# 第一部 諸国の民芸

序	215
民芸という言葉	217
民芸と伝統	218
手工芸と機械工芸	219
民芸と地方性	230
日本の民芸	233
琉球	315
琉球の民芸	335
織物と染物	336
陶器	337
漆器その他	338
九州地方	40
鹿児島県の部	40
薩摩の苗代川窯	40
大隅の龍門司窯	40
熊本県の部	42
熊本市の雜器	42

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

		来民の团扇	
福岡県の部	馬出の曲物	4 3	4 3
	野間の皿山	4 3	4 3
	筑後の二川窯	4 4	4 4
佐賀県の部	筑前の高取窯	4 4	4 4
	小石原の皿山	4 5	4 5
鳥取県の部	肥前の白石窯	4 6	4 6
	肥前の黒牟多窯	4 6	4 6
大分県の部	小鹿田皿山	4 7	4 7
島根県の部	因州紙	5 4	5 4
	漆器と木工品	5 4	5 4
	因吉絣	5 3	5 3
	倉染織	5 2	5 2
	津井窯	5 2	5 2
	因久山窯	5 1	5 1
	牛ノ戸窯	5 0	5 0
	概要	5 0	5 0
中国地方		5 0	5 0

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

岡山県の部	酒津窯	59
布志名窯	56	56
出雲紙	57~	57
岡山県の部	59	59
安来の木工	54	54
日の出団扇	55	55
岡山県の部	59	59
廣島県の部	60	60
倉敷綾通	61	61
花むしろ	60	60
山口県の部	62	62
座蒲団入れ	62	62
掘越窯	63	63
四国地方	64	64
香川県の部	64	64
漆引团扇	64	64
すべ箒	64	64
塵取	65	65
高松の風	65	65
神酒口	65	65
飯室	66	66

# SAMPLE

# Shoshi-Shinsui.com

徳島県の部	666
高知県の部	666
能茶山窯	667
土佐の金物	667
竹の子笠	668
腰付笊	668
愛媛県の部	668
玩具	669
進物荷籠	669
近畿地方	70
和歌山県の部	70
波団扇	70
木籠	71
三重原の部	71
竹椅子	71
うどん蒸籠	71
赤ローソク	72
白子の型紙	72
丸柱窯	72
滋賀県の部	73
信楽焼	73

# SAMPLE

# Shoshi-Shinsui.com

		田圃染	7 3
		陶器	7 4
		かわらけ	7 5
		竹製家具	7 5
		仏具	7 6
京都府の部			7 4
大阪府の部			7 6
奈良県の部			7 7
兵庫県の部			7 8
長野県の部	8 0		
木曽の片口		和紙	7 7
湯桶と飯櫃	8 2	壳葉行李	7 8
曲物	8 2	丹波立杭窯	7 9
染織品	8 2		
富山県の部	8 3		
紅殻紙	8 3		
瓶掛と湯釜	8 3		

# SAMPLE

## Shoshi-Shinsui.com

新潟県の部	越後上布	火消壺	84
	五泉平	鉈袋	84
	船簾笥	版画家棟方志功氏	87
	石御法子		87
岐阜県の部	90		
	山刀鞘		
	美濃紙		
飛騨盆	91		
石川県の部	91		
	山中の漆器		
福井県の部	92		
	葛布織		
静岡県の部	93		
	唐草の型染		
愛知県の部	93		
	漆器		
瀬戸の焼物	95		
	和紙と型染紙		

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

山梨県の部	97	関東地方	97
印伝革細工	96	栃木県の部	97
		益子の文化性	97
		益子窯の工程	97
		びく	102
		鹿沼箒	106
		和鞍	106
埼玉県の部	109	和紙	107
和紙	109	石屋根	107
簾間焼	109		
簾	109		
和紙	109		
小川の和紙	110		
越生の五色団扇	111		
加須の鰯幟	112		
群馬県の部	113		
赤城鉈	113		
赤城のしょいこ	113		
第4	114		

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

神奈川県の部	1 1 4
寄木細工と挽物	1 1 4
千葉県の部	1 1 5
広本長子氏の型染	1 1 5
東京都の部	1 1 5
黄八丈	1 1 5
芹沢鉢介氏の型染	1 1 6
ガラスのコップ	1 2 0
日本民芸館	1 2 0
たくみ工芸店	1 2 3
柳悦孝氏の織物	1 2 4
硯工 小野文吉翁	1 2 5
概要	1 2 9
東北地方	1 2 9
青森県の部	1 3 1
陶器	1 3 1
ぜんまい織	1 3 2
南部の菱刺し	1 3 2
津軽のこぎん	1 3 2
蓑(けら)	1 3 3
はばき	1 3 4
やつかり	1 3 5
あけび 細工	1 3 5

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

	秋田県の部	136
	角館の樺細工	136
	はげご	137
	さかさ帽子	138
	錠前	138
	漆器	138
	羽後の檜岡窯	139
	羽後の栗沢窯	139
	岩七厘	140
	横手の朝市	140
岩手県の部	漆器	142
	竹細工	144
	陸中の久慈窯	145
	口付鍋	145
	菓子櫃	146
	色染和紙	146
	蓑笠	147
	編笠	147
	蓑	147
	背負袋	148
	雪下駄	148
宮城県の部	南部の柴根染	148
陸前の堤窯	150	148

# SAMPLE

# Shoshi-Shinsui.com

常盤紺形	151
仙台簾笥	152
白石の紙布	152
強製紙	154
鳴子の漆器	154
鳴子の、器	156
鬼首の曲物	156
福島県の部	156
概要	156
会津本郷窯	157
会津の漆器	158
和紙	158
絵ローソク	158
科皮編物	159
蓑	160
陶器	161
蓑立	162
浅い雪靴	163
蓑	164
蓑立	165
山形県の部	160
弁慶	166
ぞり	166
ぞり	166
ぞり	165

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

背負縄	167
こえかご	167
藁円座	167
はげご	167
麻布	168
曲わづば	168
弁慶膳	169
笛野彫	169
真鍮灰ならし	169
吉原五徳	170
長井筈	170
将棋の駒	170
荒砥の瀬戸山	171
銀鱗荘	172
アイヌの工芸	172

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

第二部 民芸隨筆

木喰上人の民芸仏  
スカンセンの一夜  
ワインチカムの陶窯  
和紙の美と特質——寿岳文章著  
淡路の人形淨瑠璃

1900

186

179

197

『日本の紙』を読む

193

パイプと煙管  
民芸としての着物

207

213

ワーナー博士と日本の民芸を語る

217

追憶の日本

218

日本の生活と禪

219

茶道の真髓

220

日本の民芸

220

大谷石の民芸

223

手漉和紙

223

輸出工芸について

225

日本再建と民芸

225

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

第三部 戦雲下の民芸隨筆

新体制と民芸運動	2 2 3 1
民族と工芸	2 2 3 6
民芸と性能	2 4 1
作家と個性	2 4 1
作家と体质	2 4 2
民芸における性能	2 4 4
将来の民芸教育	2 4 6
戦闘地区の工芸運動	2 4 8
満洲の友に	2 5 3
山陰の民芸	2 5 8
五条坂	2 5 8
鳥取へ	2 6 0
鳥取の民芸	2 6 1
「たくみ」と吉田邸	2 6 3
「ロゴス」の記念会	2 6 5
図書館での講演会	2 6 6
松江へ	2 6 7
島根の民芸	2 6 9
浴衣そば	2 7 0
町にある民窯	2 7 1
樂山窯	2 7 1

SAMPLE  
[Shoshi-Shinsui.com](http://Shoshi-Shinsui.com)

菅田庵	272
小泉八雲の旧居	272
松江の味覚	274
民芸座談会	274
千鳥城と布志名窯	274
米子へ	275
東京へ	276
方言と郷土愛	278
スカンセンと駒場	278
配列の美	286
日本の時計	291
和時計の価値	291
和時計の文献	292
和時計の蒐集家	292
モディ氏と和時計	297
モディ氏と和時計	298
竹と人	303
竹と正義	304
竹と文化	303
竹と信仰	305
竹と童心	306
竹の花	306
吐月峯	307
竹の絵	308
竹と医療	308

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

着物 長屋門  
・きもの・キモノ

312

民芸の意味

道具・衣食住・地方性

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

凡例

一、本書は、式場隆三郎著『諸国の民芸』（一九四七年、大日本雄弁会講談社刊行）の全文、および『民芸と生活』（一九四三年、北光書房刊行）より選んだ文章をまとめたもので、書名は本書刊行所が付けたものである。第一部と第二部は『諸国の民芸』に属し、第三部は『民芸と生活』に属する。第二部（『諸国の民芸』では「民芸夜話」の題名で括られていた後半部分）と第三部の題名は本書刊行所が付けたが、そのほかの部章、節、項の文言は元のままで、各部内における文章の配列順も元のままである。第一部冒頭の「序」は『諸国の民芸』全体に対する序文であるが、本書では便宜的に第一部内の冒頭に収録した。

一、仮名遣いは現代のそれに変更した。（芸術的引用文を除く）

一、漢字は旧字体から新字体に全て変更した。

一、鍵括弧の使用は現在一般の慣例によった。

一、読点を現代風に補ったところがある。（例 「しご」と読む「四五」）

一、現在では漢字表記よりも仮名表記のほうが一般に好まれていると考えられるもの（当て字を含む）を仮名表記におきかえ、送り仮名も現代的に調整した。

一、踊り字は「々」のみを使用した。二の字点は「々」におきかえた。

一、なくともよい、あるいはなくもがなと感じられる読み仮名ルビは省いた。加えた読み仮名ルビもある。

一、目立つ語句の不統一は統一的に処理した。（例 タバコ／煙草／菓）

一、本書刊行所による最小限の注記は「」で括って記した。

SAMPLE  
ShowSite.Shinsai.com

第一  
一部

諸  
國  
の  
民  
芸

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

## 序

民芸運動が起つてから、すでに二十余年の歳月が流れた。駒場に民芸館ができて十余年になる。柳宗悦先生は雑誌『工芸』を百二十冊近く刊行され、私は雑誌『民芸』を七十冊出した。柳先生の永年に亘る不斷の熱情と努力は、この仕事を国内にひろめ、東洋各地にひろめ、今日では世界的のものにまでされた。柳先生をめぐる多くの同志たちの努力もよい実を結んだ。この二十幾年かの民芸運動は、必ずや歴史に残ると思う。私はかつて「民芸書誌」という一篇を書いたことがあるが、今日ではあのときの数倍もの刊行物が出ている。いつか暇をつくつて、完備したものを編みたいと思つてゐる。

終戦後、わが国が手工芸の領域でたちあがる必要を感じた人々は、民芸への異常な関心をたかめた。そしていろんな出版社からも、そのような著作を求められた。ここに私が受けたものも、その一つである。この本は永年「たくみ工芸店」にあって、各地に民芸品の購求や調査の旅をして來た上野訓治君の助力によつてできた。しかし、柳先生はもとより、多くの同人たちによつてひろく調査された資料に負うところが大きい。だからこれは、私や上野君の個人のものでなく、民芸協会の業績の一部を紹介したものといつてもよい。芹沢鉉介兄は、いつもながらの美しい図案で、装幀や小間絵を描いてくれた（本書では省略）。私は上野君の日々ならぬ助力と、芹沢兄の協力を心から感謝する。またこの一年半近くをこの本の刊行のために尽力された講談社出版局の清水栄治郎氏の厚誼も忘れがたい。

私はこの本が日本再建のための民芸的諸事業の参考に役立つようになると信じてゐる。これは単なる郷土の土産品の紹介や趣味家への案内書ではなく、われらの生活の倫理化、健康化への大きな使命をもつ民芸への関心をたかめるためであり、貿易再開の折にも備えるものであらせたい。

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

一九四七年五月十一日夕

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

式場  
隆三郎

## 民芸という言葉

民芸とは、民衆的工芸のことである。これは十数年まえに初めてつくられた言葉で、工芸美論における革新的な思潮である。民芸品とは民衆が日常生活につかう工芸品のことで、貴族的な工芸や美術的な工芸品と違った立場をもつていて、つまり日常生活に切りはなせない民器であって、普段使いの工芸品のことである。ある特定の人々が特殊な場合につかうものでなく、だれでも使う平凡で、安くて、どこにでもある生活具が民芸品である。その美しさと意義を発見したのは、民芸論の功績である。民芸品は有名な美術家や工芸家の作でなく、無名の職人の手でつくられ、多量にできるものである。しかし、決して粗末なものや下等なものではないし、ひねくれたものや、いかるものでもない。

日常生活の中にとりいれられる工芸品は、華美であつたり、繊細であつては用にたえない。素朴で健康でなければならぬ。そこに民芸の美が宿る。民芸が美しくなるのは、用途にかない堅実な性質をもつからである。忙しい生活に使われるためには、使いやすい形をもたねばならぬ。それは平凡で自然な形を要求する。無駄な装飾をのぞかねばならない。そして材料が誠実で、長い用途にたえなければならぬ。しかも安価で多数にでき、だれでも買えるものであらねばならない。

このような目的でつくられる着物、食器、その他一切の日常生活に関係ある衣食住の問題が民芸の領域に入る所以である。だから大きいものは、住居も含まれる。民家は庶民の家であり、民芸的な家のことである。しかし、用途といつても必ずしも手や足その他身体ばかりの対象を意味しない。眼や心の用途も含まれる。床の間の絵は、決してすべてが無用な装飾とはいきれない。

それは日常生活に必要な心の用具である。しかし、そうした絵も天才や個人作家のものばかりでな

く、名もない人のかいた無名なものも美しいというものが民芸論の主張である。たとえば、泥絵どろえとかガラス絵とか大津絵おおつえとか絵馬とか、版画のある種のものとか、切りぬき絵、漆絵などは、職人によつて多数につくられ、民画とよび民衆の生活に親しまれたものである。

民芸品は民間から生まれ、民間で使われるものである。だから自然に姿も質素であり、頑丈で、形も模様も単純である。美術工芸品のように、作者が自分の名を残そうとするために、故意に作為をこらしたものでないから、無心で素直である。貴族的な工芸や美術工芸にも各々意義があり文化に貢献するところが大きいが、何といっても特殊の少数の人の専有になる傾きがあり、生活に交わることが少なく、とかく飾りものになる。そこへゆくと民芸品は多くの人々の生活に入り、生活を助ける実用品であり、しかも自然な美しさがあるので親しみ易い。工芸の本道は生活具である。従つて民芸がその主たる目的でなければならない。美術工芸が美しくないというのではない。それが工芸でないとうのでもない。しかし、その価値は過大視され、過分な保護をうけてきた。それに反して、今までほとんどどのその価値を認められなかつた民芸品こそ、このような時代に再認識される価値をもつものである。

### 民芸と伝統

民芸は民族の伝統の上に立つ工芸品である。伝統は長い経験と智慧を基礎として、民族が血と愛をもつてうけついだものである。日本の民芸は、日本民族の伝統から生まれたものであつて、日本特有な材料、技法、組織によつてつくられている。

日本人の心を語るとき、千万言を費すより一つの茶碗を示す方がはるかに有効な場合がある。その

SAMPLE  
Show-ni-Shinsui.com

茶碗がたとい新しい時代の生活にあうように、形をかえ、色彩をかえていても、器物の中に流れる伝統が生きているならば、心ある人は日本人に逢う想いがするであろう。

## 手工芸と機械工芸

科学の発達は機械工芸の隆盛をうんだ。これは新時代に生きるものにとつて、大きな幸福ではある。しかし、そのために利潤が生まれ、商業主義の弊害が伴つてきた。それは質をおとし、形を悪くした。粗悪な工芸品が氾濫する結果を招いた。民芸は誠実な手工芸であつて、民族的な色彩をもつてゐるが、機械工芸はとくに浅い普遍性をおびやすく、地方色を稀薄にし、粗悪になる。これは国民的生活にとって、有害なことである。

このごろ欧米で手工芸の復活が盛んになつてきたのは、機械工芸の粗悪さを知つたからでもあるが、一つには民族的意識の目覚めを語るものとみてよい。機械工芸には手工芸のもたない新しい美がある。やがてそれが新しい民芸として完成される日もくるであろう。しかし現在では、本格的の民芸品は大部分手工芸である。

幸いなことに、日本の実情はこの点では欧米をはるかに抜いている。日本にはまだ亡びない手工芸の伝統が各地に無数に残つてゐる。日本は優れた手工芸の技能をもつ工人を沢山もつてゐる。この事實を忘れず認識を新たにして、その保存発展に力をそそぐべきである。

機械工芸の初步は、手工芸の模倣であった。しかし、今では機械工芸独自の美をつくろうとしている。だが手工芸と機械工芸は、決して相容れぬ敵ではない。各々その長所をいかし、提携しあつて、はじめて健全な生活工芸ができるのである。

## 民芸と地方性

日本の民芸が東北や山陰や九州や南の島々などに豊かに残り、しかもまだ盛んにつくられつつあることは意義が深い。中部日本にも皆無ではないが、稀薄になりつつある。比較的残されているのは、中部の西側である。これは中央文化におくれてている地方の悲しむべき現象と思う人が多い。そして民芸は機械文明に取り残された、不幸な貧しい状態に見出されるものだと解釈されている。

しかし、これは皮相な考え方であって、それらの地方は文化的に貧しいのではなく、かえつて豊かなのだといいたい。現代の中央的文化生活が、果して本当の人間的生活であるかどうかを反省してみよう。かかる大衆が夥しく群居する生活は、消費の過大によってその土地からの生産物では足りなくなる。ほとんどすべての生活必需品は、地方から仰がねばならない。そのためには新鮮でないもの、品質のよくないもの、安価なものへと流れゆく。このような生活は、決して恵まれたものではない。いわゆる中央人が、とくに地方の民芸に驚嘆し心ひかれるのは、自分たちの生活に失われたものへの憧れからでもある。

地方には各々その特徴があつて、郷土の人々に親密につながる生活必需品がある。しかも誰もその有難さを感じないほど、板についている。都会人は不満をこらえつつ、やむなくいろいろな品物に接している。外観は派手になり、活潑であつても、実質は反対なのである。

民芸の本質は、健康な生活のためにつくられた地方的色彩の濃さにある。材料がその地方に豊かにあってこそ、初めて正しい民芸が生まれる。だからこれを無視して、故意につくるうとした民芸品には、よいものが少ない。まずその地方の生活のために、どうしても必要なものから発生している。そ

れが熟練によつて大量生産されて、初めて他の地方へもおくり出されたのである。

現代の各地の土産品が、だんだん地方的特徴を失いつつあるのは、商業主義の犠牲になつて、私利のために軽薄粗雑なものになつたのと、交通運搬の発達が生んだ結果である。それに加えて遊覧客の遊びの心につながつてゐるので、生活的色彩が稀薄になつたからである。この輸入的な土産品と、土地から生まれる民芸品との比較は工芸の道における大きな示唆として反省されねばならぬ。いわゆる土産品のようなものは金がとれてその地をうるおす道になるとはいえ、かかる無駄なものは整理されてよいと思う。日本民芸協会の同人たちが、この十余年来くまなく全国を調査して歩いた結果は、中央部では西日本海側、ことに出雲や因州、それに北九州、琉球、東北六県などが民芸の宝庫であることを確認したのは、このような理由によるものである。五、六年まえの琉球民芸調査や数次にわたる東北各地の調査は、ますますこの確信の誤りないことを証拠だてた。琉球の文化的価値は、今まではずとして言語問題や、一部の建築、一部の染織に限られていた。しかもそれらは、多く過去のものであつた。しかし民芸の立場からみると、まだ無数の民芸品が続々発見され、それらが今もなお生活に密につながつていることがわかつた。過去を讃美し、再び帰らぬ時代を追慕するのも意義はあるが、現代的価値が発見されることは、さらに大きな悦びである。

交通の不便と物資の欠乏を憫まれていた琉球が、民芸の宝庫であつたことを意外に思う人が多いかもしだれぬ。しかし、時の流れはそういう不便を克服しつつある。あの島の文化的価値が再認識される日は、近づきつつある。ここに文化の中央性と地方性の大きな問題が横たわっている。

もし琉球の文物が時の流れにまかされるならば、あの色濃い民芸も亡びて終うであろう。今にしてその地方性の意義を闡明し守護しなければ、宝庫は全く空虚となるであろう。しかも、あの島がいわ

ゆる中央文化と同じものとなつたら、民衆は果して幸福であろうか。

改善すべきものは、百年の習慣でも捨てなければならない。わけても衛生思想の普及や改善は、現下の急務であろう。しかし、あの豊かで健康な民芸の亡びることは、琉球の滅亡を意味する。民芸は遊戯ではない。正しい生活の糧である。生活の反省のためには、正しい工芸があらねばならぬ。その生活を安泰にするものは、地方性に合致した民芸である。われわれの仕事が一時の旅行的興味でなく、不朽の生活的基礎への反省のためになされていることを理解してほしいと思う。

蒐集された東北民芸品の大部分が、生活必需品であつたことを知つて、私は東北人の生活がまだ失われていないことを祝福した。誰でも東北が自然に恵まれず経済的能力の低さを指摘して嘆く〔原文ママ〕。しかしあの民芸品に生きている東北人の幸福の羨むべきことをも反省してよいと思う。昔からみたら崩れているものも少なくないだろう。しかし、まだあそこまで守られている生活の正しさは、都

会人による教訓となるだろう。

機械文明は否定できない。その便利さは人間を幸福にはしたであろう。けれども手から生まれ、身体から生まれるもののはさ、正しさを忘れてはならない。どんな時代が来ても、この本格的のよさは消えないはずである。民芸は工芸道における規範学である以上、生活の鏡ともなるべきものである。用に即する工芸美は、心をも豊かにする。用が目的であるから、趣味や耽溺とは違う。この混同が到るところにみられている。

民芸は逃避的な趣味ではなく、生々とした現代的意義をもたねばならぬ。そのためには、生活に即した地方性を表現しなければならない。地方人はこの反省の上にたち、中央人は失われたその特性を補うために正しい民芸につくべきである。

## 日本の民芸

日本はその文化の発達にあたって、いろいろの国から多種多様なものをとりいれた。しかし、それをすっかり日本的にして、どこの国にもない日本的なものを創造した。日本は島国であるための不便はあつたろうが、生活は楽しく、伝統は連綿としてつづき、工芸文化の華は美しく咲きそろつた。日本は世界に類のない民芸の国である。

しかし、近代の文明は交通の便利を来たし、欧米の風潮が無節操にしかも急激にとりいれられた。そのために尊い伝統を捨て、根もない生活具を無批判に過分に移入してしまった感がある。その結果、ややもすれば日本的の特性を失つたものが、新しい時代の生活具の規準のように誤解されやすい。だがいまや、日本人は日本民族の特性を發揮しなければならない自覚がおこつた。浅薄な外国模倣主義と同様に、浅薄な單なる復古趣味も捨てねばならない。国家はいま敗戦の傷手から一日も早く立ち直らねばならない時に際して、最も健康で強力な国民的生活を要求している。かかる折に建設されねばならぬ新しい生活文化は、日本的な民芸の活用をおいてない。われらは祖先の残した民芸品をもう一度検討し、その中に含まれた用途から生まれた美を発見して、新しい時代の生活具の精神としなければならぬ。不要なものは一つでもへらさねばならぬ現代にあって、ぎりぎりの生活の中にも輝く美のあることを知つてよい。

生活から生まれ出る美は、用途にかない、堅実で、質素な工芸品である。それが民芸品なのである。日本人は日本的な民芸美をもつ衣食住の中に生活した方が幸福である。祖国愛はそうした日常生活によつて育成強化される。現代こそもつとも日本的な民芸品が要求され

ね  
ば  
な  
ら  
な  
い。  
。

SAMPLE  
Shoshi-Shinsui.com

# 琉 球

## 琉球の民芸

緑の深い梯梧・榕樹・福木などの樹々が繁茂し四時花のたえない南国の琉球には、工芸の花も多種多様に咲き誇った。南北三十里の本島につづく久米島、宮古、八重山の島々の小さな地域から世界に誇るべき数多くの工芸品を生んだ。中央から遠く隔離された孤島のことだから、近代文化の嵐も広い大洋を押し渡ることが少なかつた。建築、彫刻、文学、工芸などすべての面で独自の文化が崩されることなく護りつけられた。丁度今から三十数年前、陶芸家浜田庄司氏の渡島が縁となりこの島に対する熱情の糸口となつた。しばらく時は流れ、昭和十四年春、柳宗悦氏外数名の渡島による調査報告が民芸協会同人たちの熱情を一層煽つた。同年十月再び琉球行きが計画され、希望者を募つたところ各方面から申し込みがあり、遂に空前の団体が結成され、年末から春にかけての集団旅行となつた。国際観光局、日本旅行協会、松竹映画社、三井報恩会、文士、医師、美術学校講師、教育者、写真家などと協会側から陶器、漆器、織物等の技術者と販売関係者が参加し、総勢二十六名が大挙して訪れた。松竹の文化映画「琉球の民芸」と「琉球の風物」はこの時撮影されたもので、今では貴重な記録となつた。ある者は数ヶ月、長いものは一ヶ年も滞在して調査研究に当つた。そして先年の調査の道

するべや土地の人々の熱心な援助によつて、予期以上の収穫があつた。

### 織物と染物

琉球で一番誇つてよいものは、何といつても織物と染物である。中でも芭蕉布はその代表的なものである。自然が与えてくれた糸芭蕉は、土地の人々を織物の道へと誘つた。今帰仁は古くから芭蕉布で名を成したが、近時大宜味や喜如嘉の部落も盛んである。特に王城の地であつた首里では優品を織る。芭蕉布は布として美しく、琉裝（琉球仕立ての着物）となつて一層美しく、碧緑の海から吹いてくる風は、袴のように張つた広い筒袖から入つて背にはらみ、腰から裾に流れる線は能衣裳の後姿に似て立派で、見るからに涼味を感じさせる。これは湿度がたかく、日光の直射の烈しい琉球の夏には、なくてはならぬ着物である。眞の琉球情緒は六月頃から盛夏にかけて深まつて行く。冬といつても東京の春ぐらい温く、砂糖黍が六尺ものび、菜種の花は咲き、子供たちの裸姿も時折見受けられ、われらにはまるで夢のような正月である。その頃には木綿や絹の紺絣を着て羽織も着る。絣は「手結い」という古風な手法で染めて絹緯の糸を幾重にも組み合わせ、自由自在な柄を織る。自由といつても各自の勝手な柄を織るのでなく、自分たちの暮らしに結びついたものから選び、約束の道は必ず守つている。道具類あるいは水雲や群星、又は井戸や、飛び交う小鳥などが図案化されている。もちろん絹織物は備えているが、自分の織れる図柄を腕に入墨をしていた老婆さえいた。織物は琉球婦人の日常の仕事の一つである。藍は土地に生える山藍を用い、材料の綿糸は他国より移入されている。古来南方のインドに発生したといわれる絣も、琉球に入つて絣としての本性を残りなく發揮し、

消化された岡柄とともに独特の文化財として讃美すべきものである。

南方の更紗や北方の友禅の影響を受け、琉球の風土に相応しい色調を用い、美しい模様を型付けして華麗な紅型となつて発達した。古くは衣裳に纏つたが、今ではその風習も衰え、作り手も減少し近年は那覇で二、三の者が仕事をつづけ風呂敷にその跡を残していた。風呂敷は型紙を用いず、すべて筒描きで松竹梅、菊、牡丹、菖蒲等の図を丸く結び中央に鶴亀や家紋などを配したものが多い。生地は木綿や麻を使い、紺の地染に朱、黄、臙脂、緑などの色をさす。なお宮古の麻紺絣、八重山の白絣、久米島の紺、読谷山の花織など多くの織物がある。

### 陶 器

琉球の陶器は、すべて壺屋で出来る。壺屋とは陶器を焼く所という意味である。九州地方では皿山、東北では瀬戸山とよぶのと同じである。昔は幾ヶ所かの地方で煙が立つたが、今でも焚きつづけていたのは壺屋だけであった。那覇から首里に向かう街道筋の途中、右手に見える松林に包まれた小高い丘が、壺屋の部落である。緑のまにまに赤い本葺の瓦屋根が色彩を添え、どの道を曲っても石垣がつき、葛のからんだ土塀の片隅には、魔除けの怪像が立っていた。うねうねと曲った小径は、身も心も美しい陶郷へと導かれる。粘土の山、片側には径二尺もある松の丸太が無難作に置かれてある。壺を頭にのせて左手で軽く支え、右手に一つ提げた娘たちが足どりもかるく、仕事場から窯場へ消えて行く。轆轤を挽く工人、呉州や飴釉こすあめくすりで達筆に絵づけするお内儀さんの姿、時には学校がえりの子供が誰にいつけられたといふこともなく、鞄を投げ出して釘彫くぎ彫りで魚の図を小皿の生地に彫っていた。聞いてみれば、近所の子供で勝手に手伝つていのちであった。そこでは仕事と厚い信仰の暮らしが習慣

が固く結ばれ、一家、いや、一部落全部によつて仕事も守りつけられていた。大体二種類のものを焼く。一つは釉薬を使わずに焼くやきしめにした甕類で、南蛮と呼ばれている泡盛の用器である。もう一つは島内の需要を満たしている日用品を一通り作り釉薬を用い線彫や絵づけをする上焼である。中国、朝鮮、南方、薩摩から取り入れた手法や型は変化に富み、種類もなかなか多い。あんら甕（油壺）、あん瓶（水差土瓶）、からから（酒注）、ちゅうか（泡盛用の小型土瓶）、わんぶう（大鉢）、まかい（飯茶碗）、じいしい甕（骨甕）、盃、皿などがつくられる。

### 漆器その他

あの目の醒めるような朱塗の漆器を見るとき、誰しも琉球のものであることに気づく。豚の血を下塗に用いるために、朱の色が鮮麗になるといわれている。近來の製品では、模様を描かない無地もの方が無難である。蜜柑型の菓子鉢、茶托、椀、太鼓盆、足付盆などがある。材料は梯梧が多く、目方が驚くほど軽く、優しい感じである。このほかに巾の広い線を黒く塗り、中央は春慶塗にした丸盆があり、特に素朴でよい。広い縁は湯呑を並べるため、中央の土瓶を取り畳んでいくつかのせ、客にそのまま出すものである。これには径二尺もある大型のもある。また墓参用の手提重箱や箱枕などにも逸品がある。

糸満では漁村にふさわしい魚籠を作る。また、遠洋に出かける剣船に備える垢取は、不思議な型であるが、手のつけ工合や丸味は水を掬うに便利に違いない。また漁夫が舟の中で使う木枕も面白い。首里の城門を思わせるような型で、裏を返せば小さな引蓋があつて、タバコの灰落しに使える。台の箱はタバコ入れになり、実に便利な楽しめるものである。那覇では紺紙を張った日傘がある。片隅に

一寸位の巴の丸紋を白く扱き、骨は綺麗な五色の糸でかがつてある。毛のついたままの豚皮を裏に張つた草履、梯梧材の下駄、杓子、手さげ籠、編笠など那覇の市場はいつも賑つていたものである。琉球は信と美の結合を如実に物語る工芸のゆたかな国であつた。しかし、いまは戦塵にあれはててしまつたところがあるだろう。ことに首里と那覇の被害は甚大であつたときく。

# SAMPLE Shoshi-Shinsu.com

## 九州地方

### 概要

別府の竹細工は全国的に有名であり、宮崎その他の地方でも、竹細工や藁工品や雑器類を多少作るが、東北地方のものに比較すると、やはり見劣りがする。これに引きかえ陶器の領域では、まず日本民窯の第一位として九州の窯を推したい。北国に育った海鼠釉や飴釉一色の暗い感じのものと違い、刷毛目、流掛け、指描、櫛描、白絵など手法も豊富で、色も緑、黄、茶と多彩で明るいものがつくられる。その制作の歴史も古く、窯場の数も多い。大体は朝鮮系統である。有田や肥前で数多く作った古格ある磁器の染付は跡をたつて、今日では見るべきものが少ない。焼物の中で一番変遷のおそい陶器が、人目に触れず勝手道具としてその役目を果し、今も細い煙をあげている。

### 鹿児島県の部

#### 薩摩の苗代川窯

鹿児島本線の伊集院駅から約二里、丘陵を切り開いた松並木を過ぎると、朝鮮風の簡素な門が目に

SAMPLE  
Shoshi & Shinsui.com

とまる。これこそ慶長以来三百余年の静かな夢を語る苗代川の陶郷である。薩摩藩の島津公が征韓の役の凱旋の折につれて來た陶工七十名によつて製陶技術が伝えられた。陶土は近在の山から掘り出され、神之川からは鉄分を多量に含んだ釉薬が採取される。窯の造りはいずれも斜面によりそつた登窯である。薄暗い仕事場で今も良い伝統を生みつづけている少數の工人たちのいるのは、有難いことである。道具の名称にもいまだに朝鮮語が残つてゐる。あの無口で静かな李朝の優品を生んだ朝鮮の窯場の風景が偲ばれる。

苗代川を代表するものは、「黒物」とよばれる無地の黒釉が良い。黒といつてもただの漆黒ではなく、燒上りによつて天目、柿釉、飴釉、蕎麦釉と千態万様の変化を見せ、黒の中に秘められたとりどりの色が現われて、無地ものでも賑かである。二、三斗入りの大甕、径二尺もある大鉢、植木鉢などを作らるが、小物では擂鉢、飯を焚く釜（山茶加）、焼酎を温める茶加、素麵鉢、口のついた雲助徳利などがある。またお盆に仏前に供える小型の釜（一合位入るもの）も可愛らしいもので、盆釜といつてゐる。「ごぜどん茶加」という四ツ口のついた珍しい恰好の土瓶も作る。「ごぜどん」とは盲人のことで、目が見えなくともどの方向からでも注げるようとに親切心から作ったものであらう。苗代川は心を惹かれ、たびたび訪ねたい陶郷である。

### 大隅の竜門司窯

竜門司は苗代川と血縁であり、李朝のよき伝統に生きる唯一の窯場である。鹿児島から北に進むこと約六里、加治木の町に入る。町の中程を左に折れ、網掛川の支流を遡ること一里ばかり、字小山田に到る。部落の入口から小高い丘の麓には、大きな窯が一基ある。耐酸甕を焼く窯で、これを通り越